

## 「全鍍連」 2019年 10月号 理事長のよこがお

群馬県鍍金工業組合 理事長 伊藤 淳

### 「コンプライアンス」



最近、声高に叫ばれている言葉のひとつに「コンプライアンス」があります。今世の中で話題になっている事件、とりわけ不祥事という類は、このコンプライアンスが守られていけば防げたのではないかと感じるものが多々あると感じます。コンプライアンスとは、「法令遵守」という意味で一般的に訳されます。加えて、法律という明文化されたものだけでなく、その社会や時勢、地域のルールや規則も遵守することもコンプライアンスを守ることにおいて重要視されています。

最近のベストスラーとなった本にユヴァル・ノア・ハラリ著「サピエンス全史 文明の構造と人類の幸福」(河出書房新社)というものがあります。その本の中で我々人類を人類足らしめ、大きく進化、発展してきた要因の一つに「虚構を信じること」が挙げられています。この虚構とは、宗教やルールといったものです。これを信じることができることで、人類は見ず知らずの人とも、複雑なことを協力してできるようになったといわれています。ただその際に「私たち」と「彼ら」という対立構造の中で、「私たち」という結束により、協力できたという側面もあるそうです。そのため、地球の裏に住む会ったことない人にも慈しみを感じることができたり、同じ屋根の下に住んでいる人を憎んだりすることができるそうです。

ダンバー数というものがあります。これは人間が安定的な社会関係を維持できるとされる人数の認知的な上限とされています。簡単に言えば、互いにその人の生い立ちや嗜好、考えまで知った上で円滑に接することができる人数の上限です。具体的に何人という数値は判明していませんが、100 から多くて 250 人とされています。換言すれば、経営や従業員同士お互いに顔を知ったうえで仕事ができる企業というのは高々 250 人ということです。何千人と従業員を抱えている企業は、全員がお互いのことを知ったうえで円滑な人間関係を構築することは不可能ということです。だからこそ、様々なルールを設け、肩書を与えることで円滑に仕事を進められるようにシステムを作っているのが今の多くの企業です。このルールや肩書もいわば虚構です。

私達が遵守しているコンプライアンスや法令も虚構にすぎません。だから無視していいというわけではなく、いついかなる時にも変容する可能性を秘めているということです。「俺たちのときはこうだった」とか、「当時は大丈夫だった」とか通用しないのです。その考え方自体が、世代や性別、経営陣と従業員、企業と社会といった分断を生んでいくのです。「改正水濁法」「改正土対法」への対応もそうです。私は、一経営者、一個人、一人類として、これからの時代に沿った考えを持っていくと思っている次第です。

(本文の内容と写真はまったく関係ありません)